鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第52号，143－156　2022

Gプロジェクト2020

I am. . .　~愛編む. . .

中村　民恵，森永　初代，佐々木　亘，末永　勝征，濵﨑　絵梨

G Project 2020
－I am... : Knitting our Love－

Tamie Nakamura, Hatsuyo Morinaga,
Wataru Sasaki, Katsuyuki Suenaga and Eri Hamasaki

Gプロジェクトとは，学芸，情報，モード，フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し，グループでの活動をとおして個性の伸長をはかると同時に，プロデュース力，グループ力，コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする，現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「I am. . .　～愛編む. . .」に決め，制作してきた作品の集大成を学内で発表した。さらに，錦江町との連携事業“地域貢献プロデュース”も８年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し，演出を行ったかを，コロナ禍での学生たちのレポートを中心に報告する。

Key Words:［問題解決能力］［協働］［大学祭］［地域連携］［学士力］

（Received September 24, 2021）

序

Gプロジェクトとは,「プロデュース力･グループ力･コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは，専門教育カリキュラムの系列【Gプロジェクト】に設けられた5つのプロデュースにもとづき，グループでのコミュニケーション能力を伸ばし，同時に個々人のプロデュース能力を高め，学生の総合的な人間としての力を豊かにすることが大きな目標である。グループでの活動に対する自分の役割をしっかり認識し，目標実現に向けた計画を立案・実行し，それぞれ特定のテーマを達成できるように指導した。2020年度は,新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な拡大により，鹿児島県においても学校行事を含め様々な学習活動が制限される中での取組みとなった。この中でも教育課程の体系化や単位制度の実質化，教育方法の改善など学士力への取り組みを継続している。特に，国内の高等教育機関で実施されるようになった遠隔授業等のオンライン教育

＊　鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

やデジタル変革に関する仕組みへの対応も，教員及び学生たちにとっては初めてのことで戸惑いながらの一年となった。

学習成果の発表の場である大学祭は，例年であれば保護者，卒業生，そして一般の方々が大勢詰めかけて，大変賑やかな中での開催である。しかし，コロナ禍のため，舞台発表は学内発表となり，その後，人数を制限して保護者のみ別日で実施された。学芸・情報・モードの各プロデュースには限定的とはいえ発表の機会が与えられた。しかし，フードプロデュースの活動が大学祭で披露されなかった点はとても残念であった。

今回は，「I am... ～愛編む...」をテーマに，各プロデュースが想いを繋いだ。発表部門は今年も3部構成とし，第1部情報プロデュースはドローンを活用して映像を制作，第2部学芸プロデュースでは絆をテーマに動く絵本を作成し，第3部モードプロデュースでは，「私たちのエール～想いを翼に乗せて～」というテーマで舞台を演出した。フードプロデュースは，伝統のアップルパイ制作を中心に活動に取り組んだ。さらに，8年目をむかえる地域貢献プロデュースは，錦江町の方々の協力により，純心水田プロジェクト等を続けることができた。コロナ禍という先の見えない1年であったが，多くの学生がそれぞれに成長する機会を得ることができた。本報告は，2020年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースでは，この報告をPDCAサイクルの一つとして教育の向上を図る。

Ⅰ．学芸プロデュース

今年の学芸プロデュース（以下，学芸）は，12人で制作を行った。イラスト，音声，編集の3つの班に分かれ活動することができた。しかし今年は，新型コロナウイルスの影響で思うように作業を行うことができず，多くの場面でトラブルが生じた。先輩方からの引き継ぎや共同作業が困難な中，私たちなりに試行錯誤をしながら取り組んだ活動となった。その取り組みを，以下に述べていく。

ストーリー制作は3月から取りかかった。今回は毎年学内テーマを決定するリーダーシップ・トレーニングが中止となったため，SNSを利用して話し合いを行った。そのため，学内テーマの決定とGコーステーマの決定が大幅に遅れてしまった。そこで，あらかじめ2つのストーリーを作成し，テーマにより近い方のストーリーを採用することとなった。また，Gコーステーマ案を学芸で事前に用意しておいた。これにより，コーステーマが決定した後も本来のストーリーの変更はほとんど行わず作業をすすめることができた。ストーリーが決定した後，それらを元にシナリオの作成を行った。今回はストーリーを作成した学生が構想を練っていたため，その学生がシナリオを担当した。同時進行で，絵コンテ作成にも取りかかり，シーンをイメージしながら台詞とイラストの構図を作成。シナリオ内での台詞は，視聴者が分かりやすく，自然に耳に入ってくるよう，何度かメンバー全員で読み合わせを行い，台詞の微調整を行った。また，今回のストーリーでは過去の台詞や友人たちの会話が伏線となり，重要度を高めたため，台詞の変更は何度も繰り返した。

キャラクター設定は，イラスト班のメンバーを中心に行った。作品の主人公は極力個性を少なくし，視聴者に共感しやすい存在にした。友人たちの違いがはっきりと見分けられるように，

髪形や色に個性を出し，お面が無くなっても分かるよう，各自のお面の色と瞳の色を揃え，違いを明らかにした。お面のシーンにおいて，複数のキャラクターが出てくる場面では，それぞれの特徴をお面の色で区別するよう工夫した。今回はお面という共通の特徴を取り入れ，色彩による人物の違いをより強調した（図1）。

図1　お面の友人たち

作成した絵コンテを中心に，下絵と線画作業を進める。今年はイラストを描ける学生が少なく，下絵はアタリ描きと下書きを1人ずつ，計2名で行った。絵コンテを参考にしながらアタリを描き，その上から下書きを行うことで，複数人でイラストを描くことに比べてイラストに一貫性が出た。しかし，1人で全てのイラストを描くことになるため，ペースが大きく落ちてしまった。それらのイラストをパソコンにスキャンし行う線画作業は，要領を掴むまでに時間を要したが，メンバー全員で取り組むことができた。

今年の作品は，例年に比べ動かすイラストを減らした。「動く絵本」と謳っている以上，映像に動きを付ける作品を制作することは不可欠であるが，今回はエンディングの数秒間のみを動かした。なぜなら，エンディングで主人公の人生が動き出すという演出を表現したかったからである。前半部分では主人公の冷め切った心情を表すため，敢えて無機質な静止画で構成し，エンディングでは前に動き出した主人公の心情とイラストが合致した構成で表現した。また，例年の作品にみられるアニメーションを使用した動きではなく，コマ送りを用いて動かすことで，よりイラスト全体に動きをもたらす表現ができたのではないかと考える。

制作の中で最も作業を要したのは，作品を時間内に収めることである。短い時間の中で，矛盾が生じないように分かりやすくストーリーを構成するため，1秒単位で微調整を行った。また，シーンを一部分だけ削除してしまうと，次のシーンとの繋がりが不自然になるため，シーンを大幅に削除し，台詞を変更することで意味の通る内容になった。作品を制作する中で，何度も同じシーンを見ていると，内容の矛盾点や違和感に気づけない場合がある。そのようなミスを防ぐため，先生方や他のプロデュースの学生などに意見を求めると良いだろう。

現代ビジネスコースの発表は，発表部門である3つのプロデュースの繋がりを特に重視する。今年は情報，学芸，モードの順番だったため，学芸では作品の終わりにモードに繋がりを持たせる演出を施さなければならなかった。しかし，学芸の作品内に無理矢理モードの要素を入れるには無理がある。そこで，学芸の作品の最後にエンドロールを挿入し，そこに今年のモードのテーマである翼を入れることで，繋がりを持たせた（図2）。

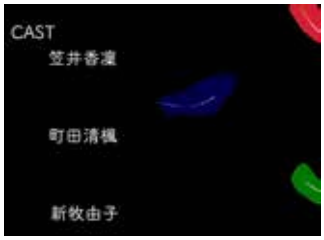

図2　エンドロール

翼の色は，モードのメンバーが着用するドレスの色と，その順番に合わせた。発表部門の作品全体が繋がりのある演出になるよう，学芸のエンドロールでモードの要素を入れることで，観覧者に既視感を与えられるような演出にすることができたのではないか。

前述したが，今年の学芸の活動は，新型コロナウイルスの影響により様々な場面でトラブルが生じた。極力大人数で作業することを避け，プロデュース間のミーティングも回数を少なく

することとなった。そしてなにより発表する機会が学内発表のみとなり，メンバーのモチベーション低下も問題であった。そんな中でも，今年しか制作できない作品を作り上げることができたのではないかと心から思う。動く絵本作りは来年度で最後となる。シナリオ，キャラクターデザイン，演出構成など，様々な部分で自分たちなりの個性を表現できるのが学芸というプロデュースである。過去の作品内容や取り組みを参考にしながら，その年にしか制作できないような，独創性のある作品を制作して欲しい。(笠井香凜)

Ⅱ．情報プロデュース

一年間を通して，パソコンのスキルアップを目指し，WindowsやMacの機能を学び，実践的に活用してきた。前期の活動は，個々のスキルを高めることを目標とし，名刺や名前シールの作成，入学式，アセンブリー等の撮影・編集・DVD制作などに取り組んだ。

情報プロデュースのメンバー7名で，7月から「Gプロジェクト」の発表部門の映像制作を行った。テーマ「I am... ～愛編む...」をもとに，発表部門のチーフ・サブチーフで話し合い，情報プロデュースが「笑顔」，学芸プロデュースが「絆」，モードプロデュースが「エール～想いを翼に～」をテーマに制作することを決めた。情報プロデュースでは，先輩方からの伝統を引き継ぐと共に，映像を見てくださる皆さんが笑顔になれるような動画を制作した。

図3　情報プロデュース提供

2年の後期の授業で，パソコン室ではテレビ番組の録画機があることを知り，動画の冒頭と末尾に番組提供風の画像を入れ，モチーフにした。そのことにより親近感がわき，スムーズに動画に入り込めるようにした（図3)。

映像では，各プロデュースの活動を情報プロデュースのメンバーでやってみた動画を制作した。2020年度は60周年という節目であったため，今までにないユーモアあふれる動画制作に挑戦した。大学祭への取り組みを進めていく中で，次のような反省点や改善点が出てきた。

一つ目は，「構成」である。最初に誰に何を伝えたいのかを明確にし，全員で共有してから，動画制作に取り組むことを勧めたい。私たちは，今までにない動画制作をすることに囚われ，学芸プロデュースとモードプロデュースとの繋がりを表現することに苦戦した（図4)。

図4　ドローンを使ってみた

二つ目は，「撮影」である。7名全員で全ての作業を行うことで情報共有はできていたものの，作業効率が悪く，客観視することができていなかった。現代ビジネスコースのテーマである「I am... ～愛編む...」は「一人ひとりが主人公」という意味と「愛を編む」という思いが込められている。この二つの意味を表現することが難しく，再撮影を強いられた。

三つ目は，「編集」である。iMovieやKeynoteなどを使用して編集に取り組んだ。iMovieやKeynoteなどを使いこなせる人と使いこなせない人がいたことによって，仕事量に偏りが出てしまった。前期の情報プロデュースの授業では，iMovieやKeynote，GarageBand，Pagesなど

macOSに付属するアプリケーションを使用し，様々な機能を学んで，大学祭に活用してほしい。

四つ目は，「リハーサル」や「ミーティング」の重要性である。リハーサルについては，発表部門全員で本番通りにリハーサルを進めることも流れを知るために必要だが，情報・学芸・モードが各自の時間を使って大講義室でリハーサルをすることも重要である。その時間を使い，改善点などを見つけることができるので，大講義室の使用時間もそれぞれしっかりと話し合う必要がある。

ミーティングについては，先輩方からも必要と言われていたにもかかわらず，あまり頻繁にミーティングを行わなかった。ミーティングで話し合うべき内容は，各プロデュースの進み具合やお互いの問題点の共有である。また，参加するメンバーは必ずしもチーフ，サブチーフだけでなく，それ以外のメンバーや先生方も交えて行うことで発表部門全員が気持ちや考えを共有する機会になる。2020年度以降はこのような形でより頻繁にミーティングを行うことを勧めたい。

2019年度の情報プロデュースの先輩から情報プロデュースの活動内容を引き継ぎ，実際に活動が始まると，チーフとして何をしてよいのか分からず，戸惑ってしまう場面も多々あった。しかし，情報プロデュース7名は他のプロデュースに比べ人数が少なく，一人ひとりが責任を持ち，動画制作に一生懸命に取り組んでくれた（図5）。

図5　みんなの笑顔が好き

この一年間，情報プロデュースで経験してきたことは私にとって，かけがえのない思い出となった。この活動で学んだことを今後の生活に活かしていきたい。そして，私たちが先輩方に支えていただいたように，私たちも後輩たちのサポートをしていきたい。

映像制作が思うように進まず切羽詰まり，来てくださった先輩方に「誰に何を伝えたいのか」を問われたときに，すぐ答えることができなかった。そこで，観ていただく方々に何を伝えたいのか，そのためにはどのような映像，写真が必要なのか話し合い，理解を深めることができた。この映像は，私たちだけで制作したのではなく，多くの人に協力をいただけなければ，完成できないものだった。2020年度は新型コロナウイルスの影響で，学内発表になりお世話になった方々にお見せすることができず，心残りであった。しかし，学長先生をはじめ先生方や学生会の方々のご尽力により舞台発表を行うことができ，現代ビジネスコース全員で大学祭を成功させることができた。

この大学祭への活動を通して「出逢えた奇跡に感謝」という言葉を痛感した。また，「時間」の大切さも学んだ。自分だけでなく，他の人の大切な時間まで使っているので，十分に計画を立ててから行動することが重要である。これからも，今までお世話になった方々への感謝の気持ちや時間を大切にすることを忘れず，学ぶ姿勢で成長していきたい。（濱岡若葉）

Ⅲ．モードプロデュース

2020年度は，モードプロデュースが15名，大裁女物単衣長着が2名の17名で舞台を構成した。

新型コロナウイルスの影響で大学祭が実施されるか不安な中，4月から活動を始めた。「私たちのエール～想いを翼に乗せて～」というモードプロデュースのテーマには応援と翼の意味を込め，支えてくださった方々の明るい未来を願い，私たちの成長を表現した。

「翼」をどのように表現するか，どのような舞台構成をすれば私たちの感謝の気持ちを届けられるかを試行錯誤しながら，10月はじめに現代ビジネスコースの1,2年生に舞台を披露した。

感染症対策でマスクを着用しての舞台練習が続く中で，表情が硬く表現力不足でまだまだ舞台に立てる状況ではなく，結束力が欠けているという評価であった。これをきっかけに舞台を構成しているメンバーで練習，演出を工夫するために何度も話し合い改善を重ねた。本番直前まで指先の細かい動きを修正し，最高の舞台になるように努力した。

シーン1　翼

学芸のエンディングから白鳥の飛び立ちをスクリーンに映した後に，大裁女物単衣長着の二人が現れる。しなやかな動きとともにお互いに翼を広げるタイミングや顔を合わせるタイミング，歩くスピードが揃うよう何度も練習を重ねた。

シーン2　天使の翼（図6）

1枚の舞い落ちる翼をスクリーンに映し出した後，鐘の音に合わせ，ピンライトで黒色のドレスが登場。みんなに愛と感謝の気持ちを届けるために，手の動きを大きく表現することで，清らかで美しい雰囲気を演出した。

シーン3　情熱の翼（図7・図8）

黒鳥が去ったあと，一人ずつ登場。一人目はシルエットを強調し，曲が変わるとともに背景が変わり顔を上げる。音楽に合わせフロントライトで強さを表現しメリハリをつけた。二人目は繋がりを演出するためお互いが見つめ合いながら登場。曲に合わせてリズミカルに動き，退場はシルエットを残しながら観客席を見つめるところにこだわった。

シーン4　感謝の翼（図9）

ふたりがクロスしながら登場し，照明を全体的に明るく，曲もリズミカルな曲を使用。お互いを見つめ合い大人の女性の動きを追求した。胸元から手を広げる動きや最後に手を伸ばす動きで，感謝の気持ちを表現した。

シーン5　飛躍の翼（図10）

一人ずつ回転して登場し，曲に合わせて動きを止め，歩くスピードに強弱をつけることで飛翔を表現。二人が向き合うシーンではタイミ

図6　シーン2

図7　シーン3

図8　シーン3

図9　シーン4

図10　シーン5

図11　シーン6

ングを何度も練習し，互いに手をのばすことで「前向きに進む」想いを表現した。

シーン6　幸福の翼（図11）

温かみを演出するために照明を全体的に明るくした。単調で似たような動きにならないように工夫した。二人で同時にターンし，手を広げるシーンでは，二人の素敵な笑顔と息の合った動きで，幸せを呼ぶ鳥を表現した。

シーン7　友愛の翼（図12）

暗転から始まり音楽に合わせてリズムよく登場。優しく微笑み，柔らかいしとやかな動きでエレガントさを演出した。退場するシーンでは，お互いが見つめ合いながら手をつなぎ友愛と絆を表現した。

シーン8　自由の翼（図13）

演出にメリハリをつけるために暗転から始まり暗転で終わり，曲に合わせてフロントライトを利用することで自由を表現した。動きはターンを多く取り入れ，二人が同時に手をあげるシーンで翼を表現。タイミングを合わせるために何度も練習し，工夫を重ねた。

シーン9　希望の翼（図14）

落ち着いた雰囲気の曲調を用い，しなやかで上品さを表した。ふたりの身長差が目立たないように常に対照的に動いた。見つめ合い胸元から手を相手に伸ばし，お互いの想いを受け取る演出にこだわった。ラストの演出は白鳥の飛び立ちを3回転することで表現した。感謝の気持ちと希望を胸に，これからの明るい未来を願い退場した。

シーン10　エンディング（図15）

エンディングに使用した曲は中島みゆきの「糸」である。テーマである「I am...　～愛編む...」と結びつけ，人との繋がりを表現した。2020年度は新型コロナウイルスの影響で活動できない期間があり制作が遅れた。だが，計画を見直し一日ごとに目標を詳細に立て制作を進めたことにより理想としていたドレスを作り上げた。しかし，モードプロデュース内での係り分担は機能していなかった。主な原因は内容の理解不足が挙げられる。2020年度は感染対策で密を避けるため，月に1度しかミーティングができなかった。このことから，2019年度のように2週間に1度の定期的なミーティングで情報交換，共通理解する必要があったと考える。

図12　シーン7

図13　シーン8

図14　シーン9

図15　シーン10

今までにない状況で戸惑う部分もあったが，みんなで励まし合いコロナ禍を協力し乗り越えることができた。この貴重な経験を通して，あらためて多くの方々に支えられていたことに気付き，これからも人と人との繋がりを大切にしていきたいと思う。また，舞台終了後には観てくださった学生や先生方，両親，友人たちから大きな拍手と感動したというお褒めの言葉をもらえた時には嬉しさと感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。仲間と共にこの苦難を乗り越え，支え合った経験を糧に，今後の社会で人と人とのつながりを大切にし，感謝の心と謙虚な姿勢を忘れずに歩んでいきたい。（宮田志歩）

Ⅳ．フードプロデュース

2020年度のフードプロデュースは選択者35名での活動となった。アップルパイ，クッキー，Ｇカフェの3つの部門に分かれ，クッキーとＧカフェは大学祭での販売を予定していたが，2020年度は新型コロナウイルスの影響により大学祭については学内発表のみ，食品の販売は中止となった。また，アップルパイ制作についても例年の活動とは異なり，学内の先生方に学びの成果を評価していただく形となった。

各部門チーフ・サブチーフを決め，情報を共有し綿密な計画，事前準備を行うことで全体での活動はスムーズに進んだ。また，全員が同じ目標に向かって行動し，お互いを助け合うことができた。特に昨年度と状況が違うため，先生方との話し合いを重ね，試行錯誤しながら制作を行った。その活動内容について報告する。

図16　アップルパイ

純心伝統のアップルパイは全員が一丸となり取り組んだ（図16)。活動を開始するにあたり，作り方の映像（DVD）を授業や試作の前に見ることで，作業の流れを把握した。コロナ禍で何ができるかも決まっていなかったが，先生方へ日頃の感謝を伝えたいという想いから，後期に学習成果としてアップルパイを制作することにした。2019年度は7回の試作に対し，2020年度は4回の試作で各自が制作したアップルパイを評価していただくことから，毎回の試作を本番のつもりで臨むようにした。試作後には全員で振り返りを行い改善点について共有した。また，出来上がりができるだけ均一になるように，作業工程ごとにメンバーを固定した。制作はアルコール消毒や手袋はもちろん，感染対策を徹底して行った。

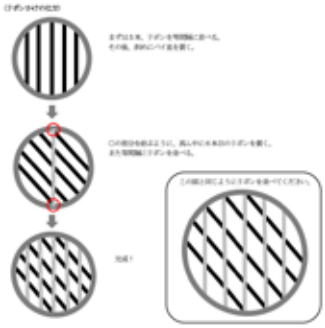

図17　レシピ

4回の試作の中で，様々な失敗を経験した。1回目の試作ではりんごの皮を厚く剥きすぎたため，りんごの量が少なくなり，大きさも均一ではなかったことからりんごの煮え方にばらつきが生じた。また，リボンのかけ方も均一にすることができず，仕上がりに個人差が生じた。これらを改善するためにレシピを分かりやすく修正した。改良したレシピは，全員がリボンを等間隔に並べることができるように図を用いた（図17)。何度か改良を重ねた結果，リボンのかけ方が均一になった。

また，10月に実施したアンケート調査では，制作者が分かるようにパイ皿に記載した制作番号をアンケートに記入していただいた。この結果，評価が明確になり，制作した本人が改善点を見つけることができた。

アンケート結果を踏まえ，11月に学習評価用のアップルパイを制作した。全員で注意点を確認することで，伝統のアップルパイを受け継ぎながら，これまでの制作の中で最高のアップルパイを完成させることができた。

次にクッキー制作については7月・8月のオープンキャンパスに参加してくれた高校生に評価してもらった。また，12月に個包装できるクッキーをインターンシップ先の企業にお礼として

制作した。2020年度は新型コロナウイルスの影響により1年生と2年生が一緒に制作活動する機会がなかったことから，制作工程を確認するために，10月にクッキーを制作した（図18）。なお，インターンシップ先の企業にお渡しするクッキーは，フードプロデュース35名全員で制作した。「社員一同おいしいかったと大変喜んでおりました」と書かれたお礼のハガキをいただき，全員で喜びを分かちあった。

図18　クッキー

Ｇカフェは，大学祭での販売は実施できず1年生を対象に「プチＧカフェ」を10月にオープンした（図19）。プチＧカフェを開くにあたり，例年のメニューから飲みたいドリンクのアンケートを取り，その結果に合わせて事前に試作を行った。プチＧカフェ開催日は大学祭と同様にスタッフ全員がおそろいの帽子とエプロンを身に着け，教室をＧカフェ風に装飾した。メニュー表も可愛らしく作成し工夫を重ねた。

図19　プチＧカフェ

当日は1年生をお客様として迎え，一人ひとりの1年生に感謝の気持ちを込めて，笑顔で明るく接客することを心掛けた。その結果，アンケート調査から接客態度の満足度が100％であった。

2020年度は，新型コロナウイルスという誰もが予想していなかったウイルスに悩まされた1年間となった。特にフードプロデュースは前年度と同じ活動ができず，先輩方のような成果を発表することが難しかった。しかし，フードプロデュース選択者一人ひとりが「今の私たちには何ができるか」を考え何度もミーティングを重ねることで，2020年度しかできない活動を行うことができたように考える。私たちがこのようなコロナ禍において，今できる最大限の活動をすることができたことに感謝している。応援をしてくださった先生方や先輩方，協力してくれた仲間のおかげである。

そして，この2年間で培った，考え抜く力や周りの人と協働し，常に感謝の心を持ち続けることを大切にしていきたい。考え抜く力や協力し合う姿勢を大切にしながら，これからも全員で協力し挑戦し続けてほしいと願う。（下拂朱麗）

Ⅴ．Ｇプロジェクトの活動について

今年度のＧコースのテーマは「I am. . .　～愛編む. . .」。I amに続く「3点リーダー」は先輩・後輩・自分達という意味であり，私たちが 「I am」を使用するときは何か答えが出ている時であるが，将来や未来に対する答えが出ていない人が多く，まだ続きがあるということを伝えたいとの想いとカギカッコには一人ひとりが主人公で口に出して想いを伝えるという想いが込められたテーマである。舞台発表は新型コロナウイルス感染症により学内発表のみとなったが，今回のテーマがどのように評価されたかについてアンケート調査を基に報告する。発表部門のアンケート調査結果は次の通りである。

調査概要は2020年10月31日㈯，学内発表を観てくださった学生・教職員を対象とし，アンケート用紙に記入する方法で回答率は19.5％であった。回答期間は2020年10月31日㈯から2020年11

月6日㈮である。

【質問1. 情報プロデュースの動画を見て笑顔になりましたか】について，一緒に笑えた43.6%，和めた51.3%と回答している。アンケートの項目が「笑えた」と「和めた」の似た項目であることから，回答する側も選択が難しかったのではないかと考える。

【質問2. 学芸プロデュースの絆の映像を見て絆を感じましたか】について，よく感じた76.9%，感じた17.9%，どちらともいえないが5.1%で，内容が伝わりにくいシーンがあったことが考えられる。

【質問3. モードプロデュースの私たちのエール想いを翼に乗せてでは，翼を手で表現されていましたか】について，よく感じた82.1%，感じた15.4%，どちらともいえない2.6%。［よく感じた］については目標を90%としていたことから，手先の細かい動きができていなかったのではないかと考え，もっと練習を重ねる必要があったと感じた。

【質問4. モードプロデュースの演出で照明が不自然だったと感じる部分はありましたか】について，全く感じなかった59.0%，感じなかった23.1%，よく感じた12.8%，どちらともいえなかった5.1%。この結果から照明の演出は自然だったが，全体的な流れから照明の色や明るさを考えると照明係の練習が必要だと感じた。

【質問5. 三つのプロデュースの発表のつながりを感じられましたか】について，よく感じた61.5%，感じた25.6%，どちらともいえない10.3%，感じなかった2.6%。初めて観てくださった方々には三つのプロデュースのつながりを感じることができなかったという意見もあった。

今回，アンケートを実施し，回答率の低さ，学科学年によって伝わり方に差があった。この結果を踏まえての改善策として，一つ目に舞台発表終了後に回収箱を設置し，その場で回収を行う。二つ目に学科学年による違いを分析するために所属を記入する欄を設ける。三つ目に私たちの想定よりも，求められていた完成度は高く，その完成度との間に大きな差が生じた。

このことから来年に向けての具体的な改善案として，作品を第三者に観ていただき，テーマとの関連性について，助言を受ける機会を増やす必要があると考えた。今回はコロナ禍において先輩方からの助言を受けることが難しかったことから，来年以降は第三者からの助言を発表部門の活動に活かせることを願っている。

次にフードプロデュースの活動についてはアップルパイ，Ｇカフェ，クッキーの三つの部門から構成されている。今年度は新型コロナウイルスの影響により学内だけの活動となった。まず，伝統のアップルパイ制作では先輩方から引き継いだ純心伝統のアップルパイを後輩へ引き継ぐことを目的として制作活動を行った。学習の成果として，学内の先生方に評価をお願いし，アンケート形式で回答していただいた。

アンケートの回答率は93%，回答期間は2020年10月27日㈫から10月30日㈮の4日間でアンケートに回答していただいた。

【質問1. アップルパイの焼き色】については，ちょうどよい75%，薄い20%，濃い2%，その他3%。表面に塗る卵黄の量やパイ皿の位置によってオーブンの熱のあたり具合に差が生じる。表面の焼き色にむらが出てしまったことから，卵黄を塗る分量を定める，丁寧に塗ることを心がける。全体に焼き色がつくようにオーブンの中でパイ皿の位置を調整しながら焼くことが，重要であることを学んだ。

【質問2. りんごの甘煮の食感】については，シャキッとした食感がある61％，柔らかく食感が残っていない14％，その他15％，記入なし10％。甘煮は5つの大鍋で作ることから鍋ごとに味や形が変わる。そのため，少しずつブレンドしたものを使用している。甘煮の仕上りがアップルパイ全体の完成度にも影響することから，来年度も甘煮の担当を決め制作する方法を継続してほしい。

次にＧカフェについてはプチＧカフェを開催するにあたり，事前アンケートを実施することで人気メニューを把握し，材料を発注することができた。次回，販売が可能となった場合には事前に調査することで，人気メニューの把握や材料発注に役立ててほしいと考える。

次にクッキーの焼き具合についてアンケートを実施した。調査概要は現代ビジネスコースの1年生38名，回答方法はアンケート用紙，期間は7月29日㈬／8月16日㈰の2回，回答率はともに100％。7月と8月のアンケートを比較した結果，7月に実施した家庭用ビルトインオーブンレンジ（IH）使用では，焼きが足りないと感じたクッキーが6％あり，スチームコンベクションオーブン（ガス）使用では，丁度良いが100％の回答であった。アンケート調査を実施したが，質問の内容や回答の選択肢の表現が不十分で改善につなげにくかったことから，質問の内容について工夫する必要があることを学んだ。

一年間のプロデュース活動を通して到達目標を達成するためには，計画性や協調性はチームで活動するうえで必要な能力になってくることを実感した。また，PDCAサイクルを意識して活動したが，PDCAサイクルを繰り返すことで，より良い作品が作れることに気づくことができた。今後の活動においてもPDCAサイクルを意識した活動を続けてほしいと考える。（立山未歩／宇都睦音）

Ｇプロジェクト開始から12年目，今回は新型コロナウイルス感染症の世界的な広がりにより，例年のような大学祭に向けての活動を実施することは困難となった。世界保健機関（WHO）が，2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」であるとの宣言後，3月11日には「パンデミック」と聞きなれない言葉を耳にすることとなった。4月新年度がスタートするが，全国で感染が拡大し4月16日の緊急事態宣言により3週間の休業となった。実際に活動を開始できたのは5月に入ってからである。学生達は感染対策を取りながら，それぞれのプロデュースごとにコロナ禍において，最大限の力を発揮し活動に取り組んだ。

新型コロナウイルス感染症の影響で学外に活動を発信できないことは，学生達のモチベーションにも大きく影響を与えた。特にフードプロデュースはその影響が大きかったが，伝統の味を受け継ぐ活動として，アップルパイの制作において力を発揮できたのではないかと考える。

また，昨年同様に活動の取り組みの理解度を測る目的で学生達はそれぞれの活動をとおしてアンケート調査を実施した。アンケート調査を実施するための準備不足やアンケート対象者が学内関係者のみと限定されてしまったことなどが報告されているが，PDCAサイクルを意識して活用しようとしたことが学生達の報告から察することができる。アンケートを取ることは容易ではなく，質問に対する選択肢の表現については今後，改善が必要であることが学生の報告にも記載されている。

Ｇプロジェクトに関連する科目のディプロマポリシーの位置づけは「情報活用能力を身に付

け，求められていることを的確に表現することができる」,「集団の中での役割を見出し，協働して自らを高める態度を身に付けている」,「問題に気付き，自ら設定した課題に学んできたことを活用することができる」となっている。関連科目として全員が履修する「課題実践研究Ⅱ」の授業アンケート結果では,「ａ　全体を通して，意欲的に取り組むことができた」が78.3%,「ｂ　半分程度の割合で，意欲的に取り組むことができた」が21.7%と回答していることから，各プロデュースの活動をとおして自ら進んで行動し，Ｇプロジェクトでの活動においてそれぞれの課題と向き合いながら，協働する態度が身に付いていることが確認できた。また，PDCAサイクルを意識した活用がなされていたことも推察される。アンケートに関しては，今後その内容の改善が必要である。(中村民恵)

Ⅵ. 地域貢献プロデュース

今年度の地域貢献プロデュースの選択者は15名であった。新型コロナウイルス感染拡大防止のため，多くのイベントが中止となり，例年通りの活動は行えない1年間であった。そんな中でも新たな取り組みとして，前年度に学生から発案のあったお茶の収穫体験を実現することができた。

お茶を栽培されている農家の方から,「無農薬栽培のお茶畑では，虫よけスプレーの使用ができない」と事前に説明があり，クラス全体に参加を呼び掛けたものの，虫が苦手な学生からは敬遠され，参加者は9名にとどまった。当日は，収穫に先立ち，でんしろう館でお茶の試飲を行った。普段の生活では，急須で淹れたお茶を飲む機会が少ない学生たちも，錦江町の特産品の「けせん団子」と「一口げだんは」をお茶のおともに美味しくいただいた。同じお茶の葉でも収穫後の乾燥，発酵の度合いで日本茶や紅茶に加工されると聞き，学生たちは一様に驚いていた。

お茶畑では，雨が降っても収穫できるようにテントが張られていた。10年ほど前に植えられたお茶の木は，手作業で一芯二葉（いっしんにより）を収穫するのに程よい大きさに成長していた。応援に駆け付けた地元のJA職員のみなさんや観光交流課，地元農家のみなさんにとっても初めての経験となったが，途中からは作業のリズムもつかめ、楽しみながら集中して取り組むことができた。前日に降った雨のおかげか虫もおらず，曇り空のため熱中症の心配をする必要もなく，予定していた量の茶葉を1時間ほどで収穫することができた。

お茶の収穫はできるだけ夕方が望ましいと，鹿児島を出発したのは昼前であった。収穫したお茶を工場に運び,紅茶に加工する機械を見学し終えた時にはいつの間にか夕刻となっていた。帰りのフェリーでは，薩摩半島に沈む夕日を眺めることができ，学生たちにとっても特別な1日となったようである。

活動が制限された状況でも，商品開発会議など，事前の準備や事後の振り返りなどにも時間をかけて活動を行う様子がうかがえた。授業アンケートでも，意欲的に取り組めたとする学生が80.0%と，どうすればうまくいくかと試行錯誤しながらも，成長を促し実感する機会となっていることがわかる。なお，活動に関する詳細は，チーフである下青木香鈴の報告を参照されたい。(森永初代)

2020年度は，例年どおり，錦江町で「純心水田プロジェクト」で除草作業や稲刈りを行い，そのお米を使った「コラボ商品開発」に取り組んだ。また，新たな活動として「紅茶プロジェクト」や「＃かごしま県産品応援市」に参加した。

「純心水田プロジェクト」では，例年自分たちで田植えを行っているが，新型コロナウイルスの影響で，錦江町の方々が田植えをしてくださった。5月に行われた除草作業では，田んぼに足を取られないよう注意し，稲に似た雑草を慎重に確認し除去した。8月の稲刈りでは，まず初めに，コンバインで刈り取ることのできない田んぼの四隅の稲を，鎌を使い手作業で刈り取りを行った。最高気温が35℃を超える猛暑日で，自分たちの手で稲を刈るのは大変な作業だった。その後，交代でコンバインに乗り，1列ずつ稲刈りを行った（図20）。いつも当たり前に食べているお米は，米農家の方々が手間と愛情を込めて作っているものだと実感し，毎日お米が食べられることに感謝の気持ちを持つことができた。

図20　コンバインに挑戦

今年度の新たな活動である「紅茶プロジェクト」では，錦江町で栽培されている「あさのか」という品種のお茶の葉を自分たちの手で摘んだ。かごの半分程度を目標に，1時間ほどで5キロの茶葉を摘むことができた（図21）。収穫後約1ヶ月間の発酵を経て完成した紅茶を試飲させていただいた。スッキリとした風味で飲みやすく，普段紅茶をなかなか飲まない人にも勧めたいと思った。

図21　お茶を乾かす様子

今年で6回目となるコラボ商品開発は，例年のスイーツに替え，今年度は初の試みとしてパンを企画した。10月から商品開発会議を7回行い，全員が納得いくまで，味やパッケージにこだわった。今回，さつまいもを材料に選んだ理由は2つある。1つ目は，幅広い年代の方々に食べていただけることである。2つ目は，サツマイモ基腐病の被害が鹿児島で広がっていたこともあり，さつまいも農家を応援するためである。県庁を表敬訪問した際に商品開発の取り組みを報告すると，知事から「とてもよい取り組みですね」というお言葉をいただいた。

商品開発会議においては，地域貢献プロデュースメンバーがローテーションで司会，お茶出し，議事録作成，資料作成，案内などの係を担当し，全員が全ての係を体験した。「事務管理」や「秘書実務Ⅰ，Ⅱ」，「ビジネス実務演習Ⅰ，Ⅱ」などの講義で学んだことを実践することができ，貴重な経験となった。

2月にはコラボパンのCM撮影を行った（図22）。神川大滝，廃校となった旧神川中学校，花瀬川などで，午前中から夕方まで撮影が行われた。錦江町の豊かな自然や観光地を発信することで，町の魅力と商品の魅力を多くの方々に伝えたいという思いをもって撮影に挑んだ。

図22　CM撮影の様子

今年度は新型コロナウイルスの影響で，発売イベントがなく，

商品の魅力を伝えられるよう自分たちで作成したPOPを県内のローソン店舗に持参し，店頭での掲示をお願いした（図23）。

図23　手作りのPOP

約1年間におよぶ地域貢献活動は，錦江町の方々や地域貢献プロデュースメンバーと話をする機会が多くあり，コミュニケーション力が上がったように感じる。錦江町の魅力を伝えることや錦江町を活性化させることを目標に活動を行っていたが，錦江町の自然に癒され，人の温かさを肌で感じ，私たちが元気をもらった1年だった。後輩たちには，これまでの地域貢献の伝統を引き継ぎ，新たな挑戦を加えながら，活動を行ってほしいと願っている。（下青木香鈴）

結　び

もともと，Ｇプロジェクトは，「トリプルパワー･リフレッシュ教育戦略－コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成－」という課題名で，2008年度から3年間，文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助＜教育・学習方法等改善支援＞」における「学生の実体験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて，進められた。それからもう10年近い年月が過ぎている。

2020年度のＧコースのテーマは，「I am... ～愛編む...」。まさに，自分は何者かを問いながら，人生にとって一番大切な愛を，心を込めて編み上げることを目標に，個々の学生がグループでのコミュニケーションを通じて，集団の中で自分たちを輝かせた。現代ビジネスコースでは，専門教育科目の5つのプロデュースにおいて学生の総合的な人間性を高めるという目的を掲げてから，13年も経過している。

今回，コロナ禍での活動は，すべてが異例であった。春には3週間の出校禁止措置が取られ，その分，夏季休業が短くなった。ミーティングもなかなか開催できない。大学祭も何回か中止が検討されたが，どうにか限定的ながら開催することができた。各行事が軒並み中止になる中，学生はモチベーションの維持に大変な思いを抱いたであろう。

ともあれ，今回“Ｇプロジェクト”を通じて，学生が試行錯誤しながらも，自分の能力を発揮し，具体的な成果につなげる機会を得たことは，大きな収穫である。これから社会人として活躍する学生たちが，「社会に必要とされる人間」となることが，スタッフ全員の願いである。我々のプロジェクトはさらなる成果を目指してより発展していかなければならない。